

新年を迎えて

永 田 雄 次 郎

新しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いやしけ 吉事

『万葉集』は、この 4516 番目の大伴家持の歌をもって終わる。「新しき」はアラタシキと読み、アタラシキでは意味をなさないと教えられたことを思い出す(蛇足です)。雄略天皇の「籠もよ み籠持ち」に始まり、有馬皇子、柿本人麿、大伴旅人、「東歌」の作者の歌など充実した歌集の最後を、新年を迎え、白雪に託した幸多き将来を宴の人々と祝い、祈る歌で飾ることは興味深い。過去を尊び、新たな時に立って希望を祈っている。見事な閉じ方である。

私達も新しい年を迎えている。『万葉集』に倣って、過ぐる一年を思い出し、新年の希望の祈りを持って、2012 年を締め括ることはできないのだろうか。一年を思い返し、その楽しみ、苦しみ、悲しみなど手ごたえある過去を素直に受け容れ、今ここにあることに感謝しつつ、新たな年の初めに「今年を良きものにしよう」と、将来に向けて心から祈ることも希望を生み出すに違いない。同時に、これは過ぐる年に対するすばらしい完結の仕方でもある。

何を根拠にして希望を祈ることが可能なのか。現世的利益のみを求めることが希望なのか。希望は自分だけのものであるのか。その方法で 2012 年をうまく完結できるか。さまざまな疑問も生じてきた。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。(ローマの信徒への手紙 12-15)」の有名な聖句が頭に浮んだ。「そうだ、皆で心をつにして希望を祈るのだ。皆のために希望を祈るのだ」と思い、大伴家持の歌も人々のために希望を祈るからこそ説得力を持っているのだと悟った。

希望とは何か。それを解く鍵は、手ごたえある過去を直視し、そこから引き出される生きる意味を人々が心をつにして探り当てる知性、感性、霊性にあるのではないのだろうか。

2012 年、うまく完結できそうですか。

(文学部教授)